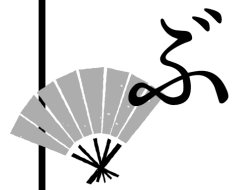


# 古典落語



# 学



落語家  
立川談四楼

## 第二十四回 狸の札さつ

「狐きつねは七化ななばけ、狸たぬきは八化やばけと申します。狸の方が一つ余計に化けるんですな」

落語家がマクラ（演目に入る前の導入部）でそう言ったら、必ずや狐か狸の嘶はなしです。

八

五郎の長屋に小狸が訪ねてくる。

「何だおめえは」

「昨日、子どもにいじめられてるところを助けてもらった狸です」

「いってことよ、そんなことは」

「いえ、家に帰って親（狸）に話しましたら、礼をしてこいと言われました。恩を受けて恩を返さないのは人間と同じだと」

「面白えことを言うな。何ができるんだ？」

「何にでも化けます」

「そうか。実はな、呉服屋に借金があって明日取りに来るんだ。四円五十銭だから一円札五枚に化けてくれ」

「バラバラには化けられません。五円札一枚でもいいですか」

「いいよ。五十銭の釣りはくれてやろう——おい、でか過ぎるよ。今度は小せえ。そうそう、そのぐれえだ。何だかこの札はあったけえぞ。おまけに裏に毛が生えてるぜ。よし、大きさを覚えたら早く寝ちまいな」

「では、おやすみなさい」

「おや、もう寝ちまったのか。いびきをかいてる。何だ、目を開けてるじゃねえか」

「はい、狸寝入りです」

「バカ言ってるじゃねえよ」

翌日、呉服屋がやって来た。

「お早うございます。できましたか、おカネは」

「長えこと悪かったな。ほら五円札だ。釣りは利子だ。取って  
いてくんない」

「いいんですか。ありがとうございます」

「それからその札な、逆さにしたたり、たたんだりしねえでその  
まま持って帰ってくれ」

「いいですよ。こっちはいただければいいんですから。では失  
礼します」

しばらくすると、八五郎の家に小狸が駆け込んできた。

「どうしたい？」

「八五郎さん。あなたは信用がありませんね。呉服屋さんは、  
あの人が五円札を持ってるのは怪しい、ニセ札じゃないかと  
疑って、私をお日様に透かしたんです。もう眩しくて眩しく  
てクシャミが出そうになりましたよ」

「そいつはすまなかったな」

「それだけじゃありません。呉服屋さんも呉服屋さんです。あ  
れだけたんじゃないけなと言ったのに、私を四つにたたんで  
ガマ口に閉じ込めたんです」

「大丈夫だったかい？」

「大丈夫じゃありませんよ。もう苦しくて苦しくてオシッコち

びりそうになりましたよ」

「ちびったのか？」

「ちびりませんよ。粗相したくありませんから、ガマ口の底を  
食い破って逃げてきました」

「そうか。でもまあ無事でよかった。オレも借金がなくなった  
わけだし」

「お役に立てて嬉しいですよ。で、逃げる時にチラッと見たらガ  
マ口に五円札が三枚ありましたので、土産にくわえてまいりま  
した」

「それが狸の札です。その後に「札が札をくわえちゃいけ  
ねえ」と言って落とす人もいます。小狸ですから、人  
間の子どものように演じます。そうすると可愛い、愛敬のあ  
る狸になります。」

笑いどころの多い噺で、「恩を受けて恩を返さないのは人間  
と同じだ」などは皮肉が効いてますね。狸寝入りや、札があた  
たかいところ、札の裏に毛が生えているなどは必ずといって  
いくらいに笑いが起き、大人も子どもも楽しめる噺に仕上がっ  
ています。

『狸賽』という噺もあります。狸が賽子に化けて恩返しをする  
噺です。

狐はずるいというイメージがありますが、可愛いですよ。次  
回はそんな噺を紹介しましょう。